Urban Design Lab. Magazine

東京大学都市デザイン（西村・窪田）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

編集長　：矢吹 剣一
編集委員：安川 千歌子　前川 綾音　村本 健造
石井 かおる　大森 文彦　北川 貴巳　松本 綾

都市デザイン研マガジン vol.151　2011.07.25

建築学会優秀修士論文賞受賞！　ーＤ１鈴木受賞報告ー

Winning the Excellent Master's Thesis Prize！–Comments from Suzuki(D1) –

text_matsumoto

D1 の鈴木亮平さんが 2011 年日本建築学会優秀修士論文賞を受賞されました！論文のテーマは「ワルシャワ歴史地区の復元とその継承に関する研究ー文化財としての価値をめぐる戦後の議論に着目してー」。早速、鈴木さんからコメントを頂いたのでご紹介します。

D1 鈴木 亮平

▲復元された旧市街

▲王宮にてワルシャワ大学の先生と

▲戦後の復元の様子

ワルシャワの復元について知りたい。ワルシャワで起きたことから " 都市 " というものを見つめてみたい。ただそれだけの想いだけで論文を書き上げた気がします。そんな論文が賞をいただけたのは、ただの想いだけで進めた研究を、あたたかく見守り、指導してくださった先生方のおかげだと思います。一方で、博士課程に進み、これからきちんと論文を書き上げる知識、技術を磨いていかなければいけないわけですが、やはりそれに挑んでいくにも、想いは大事なのだな、と感じています。また、ワルシャワにて、優しく僕の言葉に耳を傾け、親切に導いてくれた方々がいなければこの論文は完成しなかったでしょう。Dziękuję bardzo! 早く英語に翻訳しなければいけないのが、最近の悩みですが…。

お祭りの季節到来！　The Season of the Festival has come!

PJ でもお世話になっている神楽坂、佐原、鞆の浦で開かれた夏祭りの様子をお伝えします！

神楽坂まつり

M1　仲村 貴文

▲賑やかな阿波踊り

7 月 22 日（金）神楽坂まつりがあり、PJ とは関わりはないのですがせっかく自分の好きな街のお祭りなので行ってみました。地下鉄の駅を出ると、阿波踊りの楽しげな祭囃子と踊り手の掛け声が聞こえてきていつもの神楽坂とは違う雰囲気を醸し出していました。人通りも多く賑やかで、まさに「日本の夏」といった感じで、これがまた一人で歩いている淋しさが更に引き出されてしまって哀しくなりました (泣) お祭りは一人で行くもんじゃないです。ビール片手に散策して裏路地に回ってみると、表の騒々しさと比べひっそりと静かな落ち着いた感じが広がっていました。

佐原の大祭

M1　安東　政晃

▲山車のの字回し

7 月 15 日（金）～ 17 日（日）にかけて、佐原の大祭が開催されました。地区によって佐原を巡回する山車の様相も巡回ルートも、衣装も様々で、地元住人のみならず外部の人々も楽しめるお祭りでした。また夜になると、山車引きの見せ場である「のの字回し」が行われたのですが、地区ごとに技術を披露しあう様は圧巻でした。歯を食いしばって山車を回す男達と息ぴったりに囃し立てる女達、そしてそれを見守る地元住人の姿に、お祭りの良さと「一体感」を感じました。やはりお祭りはまちづくりの基本なのだと改めて実感しました。

お手火神事

text_yasukawa

▲大手火に火を入れる。地鳴りのような歓声があがる。

7月9日(土)鞆の夏祭り「お手火神事」の調査に行って来ました。メインは前夜祭として行われるお手火で、５ｍもある松明三体を町ごとに担ぎ、僅か 60 段程の石段を約３時間かけて上っていきます。火の粉や火の塊の木片が降り注ぐなか、１つの松明を 10 人程で担ぎ互いに命を支え合う姿は、各町の共同体としての強い結びつきを象徴しているようでした。調査としては、石段を松明が上って行く中でゆっくりと変化していく空間や，神輿ルートと舗装等を記録。しかし１番心に残ったのはやはり祭を真剣に楽しむ、鞆に暮らす人たちの姿でした。これらを鞆雑誌の中でどう表現するか、よく考えまとめたいと思います。

特別企画 プロジェクト報告 短期連載

ルンビニ LUMBINI-project プロジェクト

ー世界遺産で歩道をデザインする（1）ー
― Designing the Pavement in World Heritage ―

7月9日（土）から16日（土）までネパール･ルンビニでUNESCO国際専門家による運営委員会が行われ、西村教授と黒瀬助教が現地を訪れました。黒瀬助教による現地報告を3号連続でお伝えします！

黒瀬 武史　助教

▲路肩のレンガを覆いつつある力強い芝生

▲聖園北側から中央部への歩道（左：整備前　右：整備後）

２度目のルンビニは、インドから続くタライ平原ならではの、蒸し暑い気候。高地にあるカトマンズとは全く違う、肌にまとわりつくような空気のなかで、昨年に続く２年目のUNESCO国際専門家による運営委員会が始まった。初日の朝、西村先生に公式行事である植樹式の出席をお願いして、イギリス・ダーラム大学のコーニングハム教授率いる考古学チームの現地調査に加わる。この数ヶ月で随分整備が進んだ中央の運河を眺めながら、北から聖園へ入った。まず驚いたのは聖園の中心部に北門が整備され、アショカ王の石柱に向かって、まっすぐに歩いて入ることができたこと。（これまでは聖園の東門がメインエントランスとして利用されていた。）北側からのアクセスは丹下プランの重要なコンセプトであり、聖園へは北側から入るべきだと提案していたが、これほど早く実現するとは！聖園内の歩道は、正月に東大チームで提案したとおり、テラコッタタイルを使い、路肩に柵のかわりとなる芝のマウンドが作られていた。おそらく１～２ヶ月前に植えられた芝生は、雨季の湿潤な気候のおかげですでに青々としている。これほどすんなりと提案したものが形になったことは（しかも世界遺産のCore Areaで！）もちろんうれしかったが、専門家としての我々のチームの責任もまたずっしりと感じた瞬間だった。2011年のお正月、隙間風が吹き込む宿の食堂で、当時D2のナッタポン、シュウランさん、M1のリー君の４人と徹夜で考えたのは、礼拝行為と遺跡保護の両立、丹下プランという理想と現実の狭間で､迷いながら考えた着地点だった。（単なる礼拝と言っても、国によっては石柱に牛乳をかける習慣も！）タイ王妃からの申し出で始まった聖園の歩道整備プロジェクトは、ルンビニの整備・管理を行うルンビニ開発公社（LDT）の実質的なトップである副議長の悩みの種だった。敬虔な仏教徒として貢献をしたいタイ側の豪華な提案に対して、遺跡保全を第一に考える考古学チームは消極的。国際専門家のリーダーである西村先生の、「我々がみんなで納得できる提案を考えましょう。」という一声で、プレゼンを終えてほっとしていた東大チームのぼんやりとした意識は一気に吹き飛んだ。まずは徹底的に関係者の意見を聞く。副議長曰く今の歩道（コンクリート）は幅員が狭く、雨期には雨に浸かってしまい使い物にならないとのこと。広くて裸足でも歩ける歩道が良いという。維持管理を担当する機関として、数年でだめになる材料は使えないと念を押された。考古学チームは遺跡が一番。Reversible, not intrusive という彼らの原則に加えて、レンガで作られている遺跡が多いルンビニでは訪問者が歩道まで遺跡の一部と勘違いしないように材料は慎重に選んでほしいとのこと。確かに。そして丹下プラン。1978年の計画書にはなんと歩道の材料は topo soil と書いてある。土で作ったあぜ道のようなイメージだったのだろう。急増する巡礼客と雨期の状況を理由にLDTの担当者は土には難色を示している。さて､どうしようか？

[次号につづく]

プロジェクト報告

足助 ASUKE-project プロジェクト

PJも４年目を迎え、いよいよ足助まちづくりプラン作成に向けて、住民の方々とのWSが開催されました！

text_ishii

▲WSのはじまりはじまり

７月13日（水）に足助まちづくりプランを検討するためのWSを８名の住民の方と共に行いました。観光と生活の融合を基としたまちづくりの“9つのカギ”と“アクション”についての提案に対して、住民の方から活発に意見をいただく事ができました。住民の方々の職種や世代によってまちの問題点や関心事が異なり、様々な意見を伺えたためとても有意義なWSとなりました。今回のWSで出された意見より今後の方向性をメンバーで考えて行きたいと思います。６月に足助デビューを飾ったばかりの私にとっては今回が人生初WSであったためとても新鮮な雰囲気を味わうことができました。８月６日のシンポジウムも若葉マークを付けながら頑張ります。

information

７月・８月の予定

７月27日	2011年度第７回研究室会議
７月28日	BBQパーティー@10階
８月　３日～６日	高山PJ現地調査
８月　３日～４日	五箇山PJ現地調査
８月　４日	清水PJ現地調査
８月　６日	足助重伝建選定シンポジウム　（西村先生基調講演）

編集後記

松本　綾

毎日暑い日が続き、本格的な夏の到来を感じています。夏の楽しみと言えば、海、花火、お祭りなどが王道ですが、わたしにとってはサッカー観戦が楽しい季節です。夜のスタジアムは意外と涼しい風が吹いていて、開放感満点。うちわ片手に、わいわいサッカーを楽しむにはもってこいなのです。今年の夏はどこのスタジアムに行こうかと画策する毎日です。